

平成23年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立中里小学校 教諭 根本 俊彦

1 派遣期日 平成23年11月24日(木)～11月25日(金)

2 研修先 学校名 つくば市立吾妻小学校

所在地 つくば市吾妻2丁目16番地

<http://www.tsukuba-ibk.ed.jp/~azuma/>

会場名 つくばカピオ(つくば市教育委員会主催)

所在地 つくば市荻間2530番地2

<http://www.tsukuba.ed.jp>

3 研修内容

(1) 公開授業①参観

①第5学年4組 音楽「和音の美しさを味わおう」

授業者 T1 大野久美子(吾妻小) T2 成島千代子(吾妻中)

教科の専門性を生かすことで学習指導を充実させるために、発声法や器楽演奏、楽典的内容に取り組んでいた。また、中学校への円滑な接続を図るために、系統立てた計画のもとで音楽作りを行っていた。

②第6学年3組 外国語活動「道案内をしよう」

授業者 T1 熊谷彰子(吾妻小) T2 松葉淳也(吾妻中)

小学校には教科としてない英語学習への児童の不安を解消し、専門的な知識を持った中学校教員と接することで楽しい授業が展開できた。また、学習の連続性を踏まえてT1・T2それぞれの立場から児童にアプローチしていた。

(2) 公開授業②参観

①第6学年4組 理科「水よう液の性質」

授業者 T1 三輪俊一(吾妻小) T2 小原奈津子(吾妻中)

本授業では、教科担任制、中学校教員TT授業を取り上げていた。また、学びへの連続性を重視し、個々へのより細かな支援による基礎的・基本的な知識・技能の定着と、発展性のある課題に取り組ませていた。

②第8学年2組 理科「化学変化と物質の質量」

授業者 T1 五十嵐瑞貴(吾妻中) T2 小泉千枝子(吾妻小)

中学校理科教員と小学校理科専科の教員とが授業づくりをし、効果的な接続を図っていた。グループごとに学び合う活動を通して、知識・技能の定着を進めていた。

③第6学年2組 算数「比例と反比例」

授業者 永岡範之(吾妻小)

小学校算数専科の教員が教科担任制を進め、教科の専門性を生かした学習活動を展開していた。中1で学習する1次関数の式や表、グラフを小6の発展学習として扱い、比例の概念を拡張させる見方や考え方を養おうとしていた。

④第7学年5組 学級活動「2年7組合同さわやか活動の準備をしよう」

授業者 杉崎妙子(吾妻中)

昨年度、清掃活動や遊びなどの縦割り班でかかわってきた第6学年と第1学年の児童が「さわやか活動」で第7学年と第2学年に進級して再開する。望ましい人間関係を育むために小中児童生徒交流学習の計画を立てていた。

(3) 基調講演「21世紀の小中一貫教育」

文部科学省初等中等教育局 視学官 宮崎活志

小中連携から小中一貫教育の変遷について、教育基本法(第5条)及び学校教育法(第21、29、45条)から読み解いた。

また、21世紀の小中一貫教育に期待することとして、児童生徒の発達に合った教育のため、小中一貫教育を推進し、制度化を検討する(教育再生会議(H19))。

さらに、幼児児童生徒に対する一貫性のある教育を相互に連携し協力し合っ

推進するという新たな発想や取組が期待されている（小学校学習指導要領解説総則編（H20））。

（４）提案「つくば市の小中一貫の構想」

つくば市教育長 柿沼宜夫

平成２４年度より、新設教科「つくばスタイル科」が始まる。この学習の根幹をなすものとして、小中一貫教育を位置づけている。

具体的には、

- 学びの連続性、持続性による個に応じたきめ細かな教育の推進
- ９か年を見通した弾力的・効果的な教育課程の編成
- 教科の専門性を生かした小学校第５、６学年への教科担任制の導入
- 発達段階を考慮し弾力化を図り、生活集団、学習集団の再構築と児童・生徒の実態に即した有効な学習展開

各中学校区において、９年間で育てたい力を設定し、共有化・系統化を図った。

（５）提案「これまでの取組と今後の戦略」

つくば市教育委員会指導課 指導主事２名

小中一貫教育を推進するために、平成２１年度から「つくば市小中一貫教育カリキュラムの構想－連続性のある学びのために－」を作成し、小中一貫教育を進めている。

具体的には、

- 共通の「目標・指導内容・指導方法の設定」
- 小中学校の児童・生徒・教員の交流、連携の推進
- 小学校５、６学年への教科担任制の導入
- 小中一貫の教育課程の編成

今後、小学校と中学校とを合わせた９年間を、４年－３年－２年の３つのまとまりとして区分する。小学校１学年～第４学年までは学級担任による指導を中心に基礎・基本の定着を図る。小学校５学年以上は教科担任制を導入し、児童・生徒の個性・能力を伸ばす学習を重視する。そして、小・中学校間の接続をなめらかにするために、小学校５学年～中学校１学年で活用力を育成し、中学校２、３学年では、発展・応用力を育成しながら９年間の連続した学びのある教育を推進する。

（６）パネルディスカッション「連続した学びがひらく未来これまでとこれからの小中一貫教育」

コーディネーター 筑波大学准教授 樋口直宏

パネラー 吾妻小教員 高崎中教員 竹園東中ＰＴＡ つくば市教育委員会
身につけさせたい力の明確化と組織作りが重要である。そのために、９か年を見通した各部会の系統表を作成することが大切である。中学校区を柱に小中学校教員によるＴＴ授業や教科担任制を導入した。

小中学校の教員が互いに授業を進める中で、小・中学校間の指導のギャップが少なくなり、連続した指導ができるようになった。各教科單元ごとに年間指導計画に小中学校教員の授業形態を位置づけることで計画的に授業を進められた。

保護者としても児童・生徒が交流したり、小中学校教員の指導を受けたりして、中学進学への不安解消に役立った。

小学校と中学校にはそれぞれの文化があるので、相手の学校文化を理解することが大切である。そこから、中学校の専門性、小学校のきめ細から指導が重ね合うことで効果的に小中一貫教育が進められる第一歩となる。

４ 感想

日立市においても、各中学校区で小中連携が進められ、相互授業参観や合同授業研究など実施している。９年間の連続した学びのある教育は重要な取組である。そこで、今回つくば市の小中一貫教育の取組は参考になった。今後、つくば市教育委員会の「小中一貫教育へのステップ２０１１」（６つの内容を５つの段階に分類）の段階表が本市において小中連携を推進するための参考になると思った。